毛沢東とユーヂンの1956年3月31日に行われた対話

A Conversation of Mao Zedong with P. F. Yudin held in 31 March 1956

福島　仁
Hitoshi FUKUSHIMA

序

パーベル・フョードロヴィチ・ユーヂンはソ連の「哲学のボリシェヴィキ化」を進める哲学者、ブハーリン派追放を実行するイデオロギー担当の党活動家、コミンフォルムの創設とユーゴスラヴィアとの対立に関わる外交官かつスパイとしてきわめて多方面において活躍し、ソ連共産党中央委員会幹部会員候補にまでなった。1953年から59年までは中国駐在大使としてスターリンの死、フルシチョフ訪中、スターリン批判、毛沢東の二度目の訪ソ、中ソ対立の開始といった中ソ両国の重大事件に関わった。さらに注意すべきは大使就任以前から中国に赴き、『毛沢東選集』ロシア語訳を指導するとともに、自身の「過渡期の理論」を毛沢東個人と中国理論界に浸透させ、毛沢東「晩年の誤り」につながる影響を及ぼした可能性がある。これから取り上げるのは彼が毛沢東との間に行った1956年3月31日の会談である。会談のソ連側の公式記録はモスクワの現代文書保存センターに保存されていたが、グリゴーリエフ、ザゼルスカヤ両氏により整理され、ロシア科学アカデミー極東研究所発行の『極東の諸問題』1994年5号に「毛沢東がコミンテルンとスターリンの中国政策を論ず」という題で発表された。(1) ソ連共産党第20回大会のフルシチョフ秘密報告の後、中共の公式見解に先立って表明された毛沢東のスターリン

観として興味深い資料である。まずは編者の前書きを除いた会談の資料を翻訳して示しておく。

Ⅰ　1956年3月31日の会談

ペ・エフ・ユーヂンの日誌から　　極秘　写し1
1956年4月「5」日
N289

毛沢東同志との会談記録
1956年3月31日

今日、毛沢東を訪問し、ソヴィエト連邦からの援助の表明に関するフルシチョフ同志の書簡を彼に手渡した。1）51の企業の建設、3つの軍事産業科学研究施設の建設について、2）ウルムチからソヴィエト中国国境までの鉄道線区の建設について。毛沢東はソ連共産党中央委員会とソヴィエト政府に深甚なる感謝を伝えるようにもとめた。

続いて私は、北京へ戻ったばかりの数日のあいだ、彼（毛沢東）を訪問し、ソ連共産党20回大会の活動ととりわけ大会の秘密会議における個人崇拝に関するフルシチョフ同志の報告の話をしたかった、と言った。毛沢東は、病気のために私との会見を延期せざるを得なかったのだと答えた。毛沢東はこう述べた。20回大会に出席していた中共代表団のメンバーが彼に大会の活動について多少話しをして、個人崇拝に関するフルシチョフ同志の報告の写しを一部持ち帰った。いまはこの報告はもう中国語に翻訳され、彼は十分理解する間があった。

イ・ヴェ・スターリンの誤りについて対話した際に、毛沢東はこう指摘した。中国の問題についてスターリンの路線は、基本的

には正しかったのだが、個々の時期においては彼、スターリンはこの問題で深刻な過ちを犯した。1926年に演説の中でスターリンは国民党の革命的能力を過大評価し、国民党は中国での主たる革命勢力だと述べている。1926年にスターリンは国民党を中国革命勢力の統一戦線とみなし、中国の共産主義者に国民党内での方針について指令を与えた。スターリンは、国民党内部に基礎を固め、この党に従うようにと言った。即ちまさしく中国共産党の国民党への従属を言った。これは中国共産党の自立的活動を大衆の動員と共産党への大衆の勧誘に限定する手かせをはめる重大な誤りだった。

毛沢東は続けた。レーニン死後にコミンテルンの事実上の指導者になっていたので、スターリンはコミンテルンを通して、中共中央委に大量の不適切な指令を与えた。これらの誤った不適切な指令は、スターリンが中共中央委の意向を軽視していたことから生じた。当時、コミンテルンの活動家である王明はしばしばスターリンに面会し、中共の現状について偏見に満ちた情報を伝えていた。どうやらスターリンは王明だけを中共中央委の意向の唯一の代弁者と考えていたようだ。

王明と李立三はコミンテルンで中共を代表していたが、自分たちの手に中共の権力を集中させようと試みた。王明と李立三の誤りを批判していたすべての共産党員たちを彼らは機会主義者だとして言い表そうと努めた。彼らは私もまさに機会主義者で狭隘な経験主義者だと呼んでいた、と毛沢東は言った。どのようにコミンテルンが中国共産党との関係について不適切に対処したのかの例として、毛沢東同志は次のように論を進めた。

中共中央委第3回総会が李立三の暴動主義的誤りの討議にあたり、この誤りを徹底的に批判する結末には至らなかったので、中共中央委第3回総会の誤りを修正するためとかいう理由をつけ、3、4ヶ月たってからコミンテルンは二人の活動家－ミフと王明－を

中共中央委第4回総会を指導する任務で中国に派遣した。第4回中央委総会の決定はミフと王明の圧力のもとに承認されたにもかかわらず、実際には李立三路線よりもっと左翼機会主義的だった。決議では、大都市を攻撃して占領すべきであり、農村地域へは戦闘を行うべきでない、と述べられた。第4回中央委総会の決定においては例えば国民党により封鎖された中国ソヴィエト地区では小商業ブルジョアジーすら根絶され、内部のすべての商業は廃止される、とするひどい偏向が承認された。この政策の結果、1929年に成立した中国の紅軍は兵士が300000名から1934－35年までに25000名に減少したが、中国ソヴィエト地区へ入った領域は99%も縮小した。都市での中共の組織は国民党により壊滅されたが、共産党員の数は300000人から26000人に減少した。ソヴィエト地区は国のほかの部分から完全に隔離され、あらゆる品物、塩さえもない状態におかれた。これはみなソヴィエト地区の住民の大きな憤慨を招いた。

王明の左翼機会主義政策の結果、ある程度は中共権力の支配に入っていた広い地域は基本的に北方中国（陝西、甘粛、寧夏の諸省）では保たれたが、王明の権力はそこへ及ぶことはなかった。コミンテルンを背景に王明は実際、中共中央委の配下から8つの軍あるいは4つの軍を離脱させようとした。王明とその追随者は国民党をすべてのよいものを自らに取り入れ、日本に打ち勝つことができる「新興勢力」だとみなした。彼らは統一戦線における共産党の独立した自立的な政策に反対し、中共の軍事力と革命の基礎の強化に反対し、中共の政策の周囲にあらゆる住民の社会層を団結させるのに反対した。王明一派は10項目からなる中共の本来の革命綱領を王明が書いた6項目からなる自分たちの綱領に取替えた。それは事実上、敗北主義の綱領だったのだが。すべてのこの政策の実行に当たり、王明はコミンテルンとスターリンの名前を後ろ盾にし、大きな権威があるように主張していた。

王明一派は彼らが武漢にあった中共中央委南方局の多数を占めていたことを利用して、軍隊と現場に正しくない指令を与えた。そうして驚いたことに、かつて延安の家の壁につるされた中共のスローガンさえも王明の指令により「国民党とのゆるぎない同盟について」等のスローガンに取替えられた、と毛沢東は述べた。

深刻なイデオロギーの闘いと第7回共産党大会のあとの大規模な説明の作業の結果、特に最近の四年間、左と右の誤りを犯した大多数の共産党員は自分の過失を認めた。王明は第7回大会で同様に自らの誤りについて書簡を書いたが、ところがその後彼の元の地位に再び復帰したのだ。すべての過去の王明の活動は、コミンテルンとスターリンの直接の指導で実行されたが、中国革命に深刻な損害をもたらした、と毛沢東は述べた。

コミンテルンの活動を全体として評価して、毛沢東はこのように指摘した。レーニンの存命中、共産主義運動勢力の団結に、様々な国の共産党設立と強化に、第2インターナショナルの機会主義者との戦いに、彼は優れた役割を果たした。だが、それはコミンテルンの活動の短い期間だった。その後、コミンテルンにはジノヴィエフ、ブハーリン、ピャトニツキーその他の類の「活動家」がやってきて、彼らは中国に関わることについて中共中央委より王明を信用した。コミンテルンの事業の後の時期には、特にそこでディミトロフが仕事をしていた時には、ある程度の前進が見られた。ディミトロフは我々を頼りにし、王明ではなく中共中央委を信用したからだ。ところが、この時期にも例えばポーランド共産党の解散その他の大きな誤りがコミンテルンによりなされた。毛沢東はこう述べた。したがってコミンテルンの活動には三つの時期を区分することができ、その第二のもっとも長い時期に中国革命の巨大な損失がもたらされた。しかも、残念だが、まさしくこの時期にコミンテルンは東方にとりわけ大きな関わりを持っていた。毛沢東は指摘した。中国革命のこの時期の状態は、他の原

因と並び、コミンテルンの正しくない間違った活動によっても生じたと率直に言うことができる。そのために、あからさまに言うと、我々はコミンテルン解散を知り喜んだ、と毛沢東は指摘した。

毛沢東は続けた。それに続く時期にはスターリンは中国情勢と革命の発展の可能性に正しくない判断をした。彼は共産党よりも国民党の勢力のほうを信用し続けた。1945年には蒋介石一派との講和、国民党との統一戦線、中国での「民主共和国」の建設を主張していた。とりわけ、1945年に中共中央委はなぜか「ロシア共産党（ボリシェヴィキ）」からの（実際はスターリンからの）秘密電報を受け取ったが、その中で重慶へ毛沢東が赴き、蒋介石と交渉するように要求していた。蒋介石がわの挑発が予想されたので、中共中央委はその派遣に反対した。けれども、私はそれがスターリンの要請であったので、出かけなければならなかった、と毛沢東は述べた。1947年に蒋介石一派に対する軍事的闘いが最高潮であったとき、我々の軍隊が勝利を収めたときにも、スターリンは中国革命の勢力を疑問視したために、蒋介石との講和の締結を求めた。中華人民共和国建国の初期即ち革命の勝利のあとですらこの不信はスターリンに残り続けた。おそらく、このスターリンの不信と疑惑はユーゴスラヴィアの事態によって呼び起こされたのであり、ましてや当時、中国共産党はユーゴスラヴィアの道を行くだろう、とか毛沢東は「中国のチトー」だとか多くが語られたのだ、と毛沢東はいささか憤慨しながら話した。私は毛沢東に、わが党ではそういった雰囲気も話もなかった、と言った。

毛沢東は話を続けた。全世界のブルジョア新聞は、特に右派社会党は「中国の第三の道について」いっせいに意見をいいたて、それを褒めちぎった。毛沢東は指摘した。当時、スターリンは我々を信用していなかったようだし、ブルジョアジーとイギリス労働党は「中国のユーゴスラヴィア的道」に幻想を抱いていたが、ただ蒋介石だけは毛沢東を「弁護して」、資本主義列強がいかなる

場合でも毛沢東を信用しないようにと、「彼は自らの進路を変えることはない」等とがなり続けたのだ。蒋介石のこういう行動も当然だったのは、彼が我々を非常によく知っていて、何度も彼は我々と衝突したり、争ったりすることがあったからである。

毛沢東はさらに続けた。中共へのスターリンの不信は毛沢東がソヴィエト連邦を訪問したときにも現れた。我々がモスクワにでかけた重要な目的のひとつは、友好、協力、相互援助に関する中ソ条約を締結することだった。中国人民は我々に、ソ連が新中国との条約に署名しようとするなら、どうしていままで国民党一派との条約を法的に存続させ続けているのか、等と質していた。条約の問題は我々にとって中華人民共和国の以後の発展の予想をつけるための特別重大な要因となっていた。

毛沢東は言った。スターリンとの最初の会談で、私は政府の方針により、条約を締結しようと提起したが、スターリンは回答を避けた。第二回の会談のときに、私は再びこの問題に戻り、中共中央委の全く同じ条約への願いを内容とする電文をスターリンに示した。私は条約調印のためにモスクワに周恩来を呼ぶことを提案したが、彼は外相であったからである。スターリンは拒否の言い訳としてこの提案を利用しようとし、「それは不都合だ、ブルジョア新聞は、中国政府がみなモスクワにある、と非難するだろうから」と言った。その後、スターリンは私との面会をすべて避けた。私の方では部屋に電話をかけることを試みたが、私にはスターリンは家にはいないと回答され、ミコヤンと会うように勧められた。これで私は腹を立て、これ以上なにもしないで別荘にこもることに決めた、と毛沢東は述べた。それから、コヴァリョーフとフェドレンコとの不愉快な話し合いが行われ、彼らは国内の旅行に行くように提案した。私はその提案をきっぱりはねつけ、「別荘で眠る」ほうがいいと答えた。

毛沢東は続けた。しばらくして、スターリンにより署名がある新

聞に載せる私のインタビューの草案が私に渡された。その文章でソ中条約の締結交渉がモスクワで行われていると知らされた。それはすでに前進の大きな歩みであった。おそらく、スターリンの態度の変化は、1950年1月に中華人民共和国を承認したインド人とイギリス人が助けてくれたのだ、と毛沢東は述べた。その後、交渉が始まり、マレンコフ、モロトフ、ミコヤン、ブルガーニン、ガガノーヴィチ、ベリヤが参加した。スターリンの主導で、交渉では、中国長春鉄道のソヴィエト連邦の独占的支配を得ようとする試みがなされた。その後、ところが、中国長春鉄道の共同経営が決定され、そのほか中華人民共和国はソ連に旅順に海軍基地を提供し、中国で4つの合弁会社が創設された。スターリンの主導で、満州と新疆を実質上、ソ連の勢力範囲に入れられてしまった、と毛沢東は述べた。スターリンはこの地域では中国人とソ連の市民だけが居住を許されるようになる、と主張した。チェコ人、ポーランド人、イギリス人を含めこの地域にずっと住んできた他の外国の代表者たちはそこから退去させられねばならない。ただ、スターリンが無視したのは、朝鮮人で、彼らは満州に150万人を数えていた。スターリン側のそのような要求は我々には受け入れられなかった、と毛沢東は述べた。すべてこれはやはりブルジョア新聞と資本主義諸国の代理人を利するだけだった。毛沢東は続けた。事実はこの条約をめぐる交渉の過程では、全く商売そのものが行われた。これは芳しくない問題が起こったということであり、そこにははっきりとスターリンの中共との関係における不信と疑惑が現れていたのである。

今では中国長春鉄道も旅順も中国に復帰し、合弁企業も廃止されたことを指摘できるのは我々には喜ばしい、と毛沢東は述べた。会談のこの部分では、毛沢東は、この交渉にフルシチョフがいなかったし、ブルガーニンがそれに果たした役割はきわめて小さかった、と強調した。

中共に対するスターリンの不信は中共指導者たちの反ソヴィエト的気分についての悪名高いコヴァリョーフの文書もそのひとつであるが、一連のその他の諸問題にも現れていた。スターリンがこの文書を中共中央委に渡したのは、おそらく、自分の不信と疑惑を強調したかったのである。

毛沢東はこう述べた。モスクワに自分が滞在した期間を通して、私はまだ我々へのこの不信を痛感したので、そのために共産党員でソ連共産党中央委員会の代表を中国での実際の状況を視察し、中国の理論家の著作を知り、同時に毛沢東の著作を検閲するために、派遣するよう依頼した。これらの著作は中国版では予め著者によって検閲されていないのに、ソヴィエトの同志たちは著者の望みに反して、その出版を迫っていたからであった。

私の（ユーヂンの）中国到着の際、彼は執拗にそしてわざわざ全国を旅行するように勧めたことを毛沢東は私に思い出させた。これに関して、中国旅行からの帰国後に政治局の何人かのメンバーが出席した場で私とスターリンとで行われた話し合いについて、毛沢東に話をした。スターリンはその時、指導的な中国の同志たちはマルクス主義者だったのかと私に質問した。私がそうだと答えたのを聞いて、スターリンは「それはいい。安心できる。我々の助けなしに自分で大人になったのだな。」と言った。

毛沢東は、まさにこう問題提起したことこそが同じようにスターリンの中国共産党員への不信を物語るのだと指摘した。

スターリンの中共への信頼をいくらか強固にした重要な要素は、おそらく、あなたの（ユーヂンの）中国視察旅行の情報と、朝鮮戦争つまり中国人民志願軍の派遣であった。

そうであるから、もし、歴史的に中国革命の進展とそれに対するスターリンの関係を見ると、コミンテルンの活動の時期にとくに広範に拡大した深刻な誤りが犯された、と看做すことができるのだ、と毛沢東は述べた。1945年のあと、蒋介石との戦いの時

期に国民党の力量の過大評価と中国革命勢力の過小評価により、スターリンは講和、即ち中国革命事業の発展の妨害の政策を採った。革命の勝利の後でさえも、スターリンは中国の共産党員に不信を表し続けた。こういったあらゆることにもかかわらず、我々はしっかりと革命の立場に立っていたが、もし、動揺や迷いを示したなら、おそらく我々は生き残っていなかっただろう、と毛沢東は述べた。

それから、毛沢東はスターリンの役割の総体的評価に移った。彼は、スターリンが言うまでもなく偉大なマルクス主義者であり、良き誠実な革命家であると強調した。けれども、彼の大きな事業において、長期にわたる期間に、彼は一連の巨大で深刻な誤りを犯し、その重大なものはフルシチョフの報告に列挙されている。これらの根本的誤りは7点にまとめられる、と毛沢東は述べた。

1）不法な弾圧。

2）戦争の過程、ただし主として戦争の末期ではなく初期において犯された誤り。

3）労働者階級と農民との同盟に深刻な損害をもたらした誤り、この一群の誤り、とりわけ農民との関係での不適切な政策については、フルシチョフ同志と朱徳同志のモスクワでの対談で言及された、と毛沢東は指摘した。

4）若干の民族の法律によらない強制移住等に関わる民族問題における誤り。だが、全体としては民族政策は正しく実行された、と毛沢東は述べた。

5）集団指導の原則の放棄、高慢と自分の周囲がおべっか使いに取り巻かれていたこと。

6）独裁的態度と指導のスタイル。

7）対外政策（ユーゴスラヴィアその他）における深刻な誤り。

毛沢東はさらに、全体として共産主義運動においては大きな成果を収めたという考えを強調した。2億人から9億人へという社

会主義陣営の成長という一つの事実自体がそれを物語っている。ところが、様々な国々、様々な党の成果が上がった前進の過程で、あれやこれやの誤りが発生した。似たようなあるいはちがった誤りは将来にも生ずるだろう、と彼は言った。スターリンにあったような誤りは繰り返さないことがよいと私は意見をはさんだ。それには毛沢東は、おそらく同じ誤りが起こるだろう、と答えた。その誤りの出現は弁証法的唯物論の視点から全く明白であり、周知のように、社会は対立の闘争を通じて、古いものと新しいもの、生成するものと消滅するものとの闘争を通じて発展するからである。我々の意識にはまだ極めて多くの過去の習性がある、と毛沢東は述べた。意識は絶え間なく進歩する物質的世界から、つまり存在から遅れるのだ。

毛沢東は続けた。わが国では、多くのものが古い、資本主義の社会から来ている。それで、例をあげると、罪人に対する体刑の適用の問題がある。この問題は中国にとっては新しいものではない。既に1930年に紅軍で尋問の際に広範囲に殴打がみられた。私は自分でも当時、罪人たちの殴打の目撃者だった、と毛沢東は言った。そのときすでに体刑禁止のしかるべき決定が取られていた。ところが、その決定は延安においてさえ違反されていて、たしかに我々は違法な銃殺を許さないように努めてはいた。中華人民共和国の成立とともに我々はこの醜悪な表れと更なる闘争に進んだ。毛沢東は続けた。物事の道理として殴打のもとでは殴られる方は虚偽の証言をするようになり、取り調べる方はその証言を事実とうけ取る、ということは全く明らかだ。いろいろな旧い習性はブルジョア的な過去から我々にもたらされ、まだ長い間、人々の意識に保存される。華美なこと、儀式、広範囲の祝典へのあこがれ、これはブルジョア心理の旧い習性でもあるが、貧農、労働者階級には客観的にこういった習性や心理が生ずる事はありえないからである。こういう様々な状況の存在が共産党に闘わねばな

らなくさせるあれこれの誤りを発生させる環境を作り出すのだ、と毛沢東は述べた。

スターリンの誤りの根本原因は神格化と非常に近い個人崇拝である、と私は意見を言った。

毛沢東は私に賛成して、スターリンの誤りは小さなものから大きなものへ成長しつつ、段階的に蓄積された、と指摘した。人はみな過ちをおかす、というのは周知のことであるが、彼は自分の過ちに気がつかなかった。毛沢東は、レーニンの原稿を見て悟ったのは、レーニンでさえも自らの著作でいろいろ語句を削除したり新たに書き足したりしていたことだ、とも語った。スターリンへの自らの評価の結論として、毛沢東はもう一度、スターリンが誤りを犯したのは全般においてではなく、個別の問題についてであることを強調した。

全体として、大会の資料は彼に強い印象をもたらした、と彼は強調した。批判と自己批判の精神、大会の後に生み出された雰囲気は我々にもより自由に一連の問題に自分の意見を表明する助けとなった、と彼は言った。ソヴィエト共産党がこれらのすべての問題を提起したのはよいことだった。我々がこの事態に主導権を発揮するのは難しいだろう、と毛沢東は述べた。

毛沢東はこの問題についてミコヤン同志が来たとき、また都合がよい機会にフルシチョフ同志とブルガーニン同志と、さらなる意見交換を続ける事を提案すると表明した。

それから、毛沢東はこの主題からは離れ、もっと熱心に短くいくつかの哲学的問題（唯物論と観念論との闘争などについて）に言及した。とりわけ、共産主義社会があらゆる対立から、イデオロギー闘争から、あらゆる旧い習性から解放された社会だと間違って想像するべきでないと彼は力説した。共産主義社会でもよい人々と悪い人々がいるだろうと毛沢東は言った。さらに彼はこう述べた。中国のイデオロギー工作はかなりの程度、教条主義と

決まり文句に悩んでいる。とりわけ中国の新聞はまだ出されている要求に答えていない。新聞紙上には意見を戦わせることが欠けているし、真剣な理論的討論もない。不十分な時間の間に、毛沢東はもう一度私と面会し、もっぱら哲学的問題について話したいという希望を表した。

会談の終わりに私は毛沢東に彼が個人崇拝の害についての「プラウダ」の社説を知っているかどうか尋ねてみた。その翻訳が3月30日の「人民日報」に掲載されていた。その社説はまだ通読できていないが、それがとてもよい社説だと彼も聞いている、と彼は答えた。今我々のところでは「人民日報」でこの問題を伝え、説明する発表の準備をしていて、近い週に新聞にそれが出なければならない、と毛沢東は述べた。3月16日から世界の新聞はみなこの問題を騒いでいるが、中国だけが今は沈黙している、と彼は冗談ぽく指摘した。

それから、私は毛沢東に16人の著名なソヴィエトの学者たちが中華人民共和国に到着したことと、20回大会を詳しく伝えるための理論会議の仕事を始めていて、その会議はソヴィエト専門家クラブで今日開かれソヴィエトと中国の学者が報告することを短く話した。

毛沢東は強い関心をもってこの情報を聞いていた。

会談は3時間続いた。毛沢東は機嫌よくしばしば冗談を言った。

会談に出席したのは中共中央委弁公室副主任楊尚昆、中共中央委編訳局長師哲、駐中国ソ連大使館参事官テ・エフ・スクヴォルツォーフであった。

駐中国ソ連大使　　ペ・ユーヂン

現代文書保存センター　フォンド5、オーピシ30、デェーロ163、リスト88-99。タイプ打ちテキスト、原本、自筆署名。

Ⅱ　内容と資料についての補足

資料の編者はこの資料中に出てくる中国人名、コミンテルンとソ連の人名に注をつけているが、中国人の通訳の師哲を含め著名な人ばかりである。ピャトニツキーもミフも改めて議論するだけの材料を今はもちあわせていない。通訳のフェドレンコはユーヂンと協力して『毛沢東選集』ロシア語訳を完成させ、50年代からの中ソ関係の重要事にほとんど立ち会った研究対象とするに値する人物だが、後に駐日大使を務め、著作の日本語訳もあり、日本人にはよく知られている。この会談でソ連側通訳を務めたスクヴォルツォーフは民国時代から中国に駐在した古参の外交官であるが、経歴は未詳である。ここではただコヴァリョーフについて一言述べておく。

イワン・ウラヂーミロヴィチ・コヴァリョーフは1901年に生まれ、1993年に没している。ソ連では交通分野で地方と軍の職務を務め、独ソ戦の期間、交通次官であった。第二次大戦末期には対日作戦を組織するため極東に派遣された。1948年5月、毛沢東の要請をうけたスターリンにより派遣され、鉄道と橋梁の修復のため300余名の専門家を率いて訪中し、満州で多数の工事を指揮した後、12月に帰国した。(2) 国共内戦末期にソ連共産党政治局員ミコヤンが当時河北省西柏坡にあった中共中央を訪れ、1949年1月30日から一週間、国内政治、対外政策、経済建設を含む広範囲かつ細部にわたる会談をしたときにコヴァリョーフは同行し、そのまま中国にとどまった。既に、スターリンと毛沢東の間には個人的な電報を交換する関係ができていて、コヴァリョーフは「ソ連共産党中央委の中国共産党における代表」という表の肩書きで、実際はスターリン個人の中共への連絡要員としての役割を担い、スターリンの偽名「フィリッポフ」あての秘密電報は彼を通して発信されていた。1949年3月に中共中央に従い北京に移り、全国の政権獲得後の経済問題を検討する委員会にも参加し

た。[3] 7月の劉少奇の訪ソに同道し、ソ連の専門家グループを伴い中国に戻った。12月に毛沢東が訪ソする際にもフェドレンコとともに同行し、国内での接待を行っていたことは資料にも見えている。

一方、コヴァリョーフはこの旅行の直前から、中国の党の実態に関しスターリンに報告する文書を作成し、モスクワへ向かう車中で書き上げた。上の資料で「悪名高き」と言われているコヴァリョーフ文書である。現地での観察とおそらく鉄道修復の任務以来の関係を保っていた高崗からの情報に基づいた12項目からなる詳細なかつ中共についてかなり批判的な内容であったと考えられる。モスクワ到着後にスターリンに渡され、相当の衝撃を与え、ソ連の政治局員の一部に回覧されたようである。1950年2月に毛沢東が帰国する前に、スターリンはこの文書とコヴァリョーフが中国から送った電文を渡してしまった。コヴァリョーフはこれ以後、中ソ間の交渉の舞台からは消えてしまう。1967年にコヴァリョーフはミコヤンからこの報告が1954年に起こった高崗失脚の一つの原因であった可能性を聞かされ、「スターリンのこの行いが事実上前もって高崗の運命を決定してしまった」[4] と述べている。この文書の全体はいまだ不明だが、ロシアのアルヒーフにも中国の檔案館にも保存されているのは確実である。極めて面白い資料であって公開が望まれる。コヴァリョーフが表から去ってから、スターリンと毛沢東の個人的連絡の役を務めたのがユーヂンだったといえる。93年までのコヴァリョーフの経歴も知られていない。[5]

毛沢東はここで三つの時期の対中政策を取り上げ、スターリンの誤りを議論している。第一に王明路線、次に国共内戦への干渉、第三にモスクワでの中ソ同盟条約締結交渉である。最後に中国との関係に止まらない全般的評価を語っている。

第一次国共合作の終了から国内革命戦争の時期を通じて、コミ

ンテルンとスターリンの対中政策はそのもくろみは明白だとしても、現実との乖離はなはだしく、二転三転して定まらなかった。資料にある1926年のスターリンの演説とはコミンテルン執行委員会第7回総会中国委員会の場で11月30日に行った「中国革命の見通しについて」(6)である。国民革命軍が北伐を進め、武漢を占領したあとのことである。一言で要約すると、外国の帝国主義勢力とそれに結びついた国内軍閥に反対するブルジョア民主主義的国民党の革命に、共産党は国民党内部において協力する、というものだった。従って、農村地域にソヴィエトの建設は行わず、農民協会を組織して、土地改革あるいは税金、小作料の引き下げを国民党権力を通して行うことになる。基本的には1923年の孫文とヨッフェとの協定の延長である。しかし、この方針は翌年の4.12クーデターでもって崩れてしまう。スターリンはこの事態に当たり、蒋介石の右派が国民党から分離したと捉え、革命的国民党による武漢政府のもとに共産党員は参加して、農村ソヴィエトは建設しないまま、土地改革を進める方針を示した。しかし、これもまた7月に武漢の国民党が共産党との分裂と共産党員を追放する決定により破綻する。中共は以後、南昌蜂起から広州蜂起に至る都市での武装蜂起へ方針転換し、コミンテルンはそれを追認するが、結局、蜂起は失敗に帰す。この経過のなかスターリンは一つの方針を示したすぐ後に、現実により裏切られ、あとは自分の誤りを弁解し、正しいと強弁し続け、さらに政策を誤り続けた。しかも、ソ連の党内での合同反対派、特にトロツキーとの権力闘争の争点として、中国が取り上げられたなかでである。毛沢東も全体としてはこのスターリン、コミンテルンの路線の上に乗っていたといえる。山間地帯へ後退して、根拠地を維持しながら、一方で都市を攻撃するいわゆる立三路線は1930年まで継続し長沙の一時的占領の失敗で終わりを告げ、30年9月の中共第6期第3回中央委員会で総括が行われた。コミンテルンはこれに満足せ

ず、まず王明が立三路線批判を開始し、30年12月にコミンテルン執行委員会東方部主任だったパーベル・ミフが訪中し、彼の主導のもとに31年1月に第4回中央委員会が開かれた。上の資料で言われているのはこの経緯についてである。王明の『両条路線』は31年1月に中共党内に配布され、上記の「6項目からなる自分たちの綱領」とはそれのことである。(7)

共産党は独立のソヴィエト建設を進め、31年末に中華ソヴィエト共和国を作り上げた。35年になるとコミンテルンの戦略は人民戦線へ転換し、中国でも国共合作が実現することになる。王明の「国民党との同盟」のスローガンとはこの政策転換後の事情を言っている。国共内戦時の干渉についても言える事だが、全般的にスターリンは国民党を味方として期待しすぎている。レーニンが敷いたソ連と国民党との協力関係のレールをどうしても外れることにためらいがあったのだろうか。この思い込みと王明という不適当な代理人のおかげで中共は毛沢東の指摘どうり、振り回され、大損害を被ったのは事実である。

戦後の重慶交渉について出てくる電報はいまだ確実な資料をさがしえていないので後考を待つ。

49年の毛沢東訪ソの出来事はスターリンが独力で政権を獲得した社会主義勢力に向ける不信が顕著であることを毛沢東が痛切に感じていたことを物語る。ちょうど、ヨーロッパにおいてのユーゴスラヴィアに相当する対処法が中国に対しても採られたということになろう。

スターリン批判への毛沢東の意見で目を引くのは、物質世界の進歩に比べ、人間の意識は後れをとる、としている点である。遅れた意識、思想を外界に適応させる文化革命をすでに思い描いているかのようだ。最後に言及された1956年3月28日付け『プラウダ』の記事と『人民日報』の翻訳、それから中共の公式に表明されたスターリン評価との比較検討は今は控える。

資料の疑問について触れておく。この資料は英訳されウィルソン・センターの冷戦研究プロジェクトの報告書に掲載されている。[8] 訳文を比べてみると、拙訳と大差はないが、三個所で異なる。第一に王明が及ぼした損害について「中共中央委の配下から8つの軍あるいは4つの軍を離脱させようとした」と訳した箇所は英訳では‘the 8th and 4th armies’（英訳164頁）つまり「第8軍と第4軍を離脱させようとした」と訳している。第二に、スターリンの誤りの全般的な原因を述べた箇所で「意識は絶え間なく進歩する物質的世界から、つまり存在から遅れるのだ」と訳した箇所を、英訳では‘It lags behind the constantly developing material world, behind everyday life.’（英訳166頁）すなわち「それは絶え間なく進歩する物質的世界から、つまり日常生活から遅れるのだ」と訳している。第三に、おわりのほうで「中国のイデオロギー工作はかなりの程度、教条主義と決まり文句に悩んでいる」と訳した箇所を、英訳では‘suffers from a spirit of puffery and cliches’（英訳167頁）すなわち「大げさな賞賛と決まり文句の精神に悩んでいる」としている。これらはどれも解釈の相違の問題にすぎない。

ところがこの英訳はロシア連邦外交政策アルヒーフの資料に基づいている。資料の番号は「フォンド0100、オーピシ49、パープカ410、デェーロ9、リスト87－98」となっている。現代文書保存センターの番号とは全く異なる。内容は英訳をみるかぎり、同一だと思われる。唯一、文言上の相違は3箇所に現れる「中国長春鉄道」（テキストではКЧЖД）は英訳ではみな‘Chinese Changchun（i.e. Harbin) Railway’（英訳165、166頁）としていることである。53年にハルビン鉄道と改称されるが、この説明を誰が、いつ加えたのかは不明である。

ただし二つの資料の葉付けのナンバーは一つずれているが、葉数は同じである。ということは、二個所にほぼ同じ資料が保存さ

れていることになる。[9] いずれかが写しということになる。このような資料に類するユーヂンと毛沢東の対話はおそらく他にもあるはずである。それはたとえば『毛沢東文集』第7巻に1958年7月22日のユーヂンとの対話[10]が収められていることから推定できる。これはロシア語のテキストは公表されていない。毛沢東はそこでも上に訳した内容と類似したことを繰り返している。

ここで取り上げた資料の編者は資料の刊行でもって、「弱いものであってもそれが現れることによりもう一度、ふさわしい資料学の基礎のうえに「スターリンと中国」というテーマの研究の必要性に関心が向けられるという希望を抱いている」[11]と述べている。それは「毛沢東とソ連」というテーマについても等しく当てはまるはずである。

注

(1) Григорьев А. и Зазерская Т., Мао Цзэдун о китайской политике Коминтерна и Сталина, Проблемы Дальнего Востока, No.5, 1994 г., С.101-110.

(2) 沈志華 『蘇聯専家在中国』 中国国際広播出版社、2003年、35−41頁。

(3) Heinzig D., 張文武他訳 『中蘇走向聯盟的艱難歴程』 新華出版社、2001年、270−274頁。

(4) 「斯大林同毛沢東対話」、彭卓吾訳『毛沢東与斯大林、赫魯晓夫交往録』東方出版社、2004年、179頁。

(5) コヴァリョーフの人柄などについては
李越然 『中蘇外交親歴記』 世界知識出版社、2001年、36−40頁。
彼の写真は沈志華前掲書74頁に毛沢東と一緒の写真が掲載されている。

(6) 『スターリン全集』第8巻、大月書店、1952年、403−420頁。

(7) これらの歴史的事実は次の書籍を参考にした。
王徳京 「聯共（布）和共産国際領導内部関于中国革命的争論及其影響」、黄修栄編 『蘇聯、共産国際与中国革命的関係新探』 中共党史出版社、1995年、263−304頁。
王健英 『中国共産党組織史大事紀実』 (一)(二)、広東人民出版社、2003年。

(8) Cold War International History Project Bulletin, 06/07, Winter 1995, pp.164-167.
http://www.wilsoncenter.org/topics/pubs/AGIAA.pdf
中訳もあるが、筆者未見。
尤金、李玉貞訳 「與毛沢東同志談話記録」、『国際社会与経済』 1995年、第2期。

(9) 現代文書保存センターは1999年3月にロシア国家現代史アルヒーフと名称を変更している。
沈志華前掲書7頁参照。

(10)「同蘇聯駐華大使尤金的談話」、『毛沢東文集』第7巻、人民出版社、1999年、385－397頁。

(11) Григорьев А. и Зазерская Т., Указ. соч. С. 102.

追記

文中に言及した「コヴァリョーフ文書」はすでにレドフスキーの手により公表されている。

12 советов И.В.Сталина руководству компартии Китая,
Новая и Новейшая История, 2004 No.1, С.125-139.